

第5学年 図画工作科の実践

1 単元名 「糸のこスイスイ」

2 単元目標 電動糸のこぎりで切り出してできる様々な形の板材を組み合わせて、立体に表す。

3 ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

4月当初は、自分の言いたいことを言うだけで満足してしまう発言の仕方が多く、相手に伝えようという意識に乏しい子が多かった。そこで、相手意識をもって話をしよう、自分の考えが相手に伝わるような話し方をしようと指導を続けてきた。その結果、少しずつではあるが、自分の考えをクラスの友だちに伝えるために、声の大きさや視線の向け方等も考え、分かりやすい話し方、伝わるような話し方を意識できるようになってきた。

さらに、自分の考えを自信をもって友だちに伝えることができるように、全体での話し合いの前に、ペアやグループになって自分の考えを交流する場面を意図的に取り入れてきた。また、全体での話し合いの後では、ふりかえりの時間を必ず取り、友だちと関わりクラス全体で話し合うよさを実感させてきた。その結果、みんなで話し合うことで、自分の考えが更に深まっていく楽しさに気づくことができるようになってきている。

教科の特性もあるが、図画工作科の学習では、個人で製作活動をする場面が多く、全体で話し合い自分の考えを深めていく学習は多くない。そこで、できるだけ多くの単元で、学習の最後に鑑賞の時間を設定し、友だちの作品の良さを見つめ、お互いの表現を認め合える活動を取り入れてきた。

4 単元と指導

①単元について

子どもたちは、これまでに「ギコギコとんとん」「ビー玉転がし」などの学習で、のこぎりや金槌などの用具を使って、木材を題材とした工作を体験してきている。本単元は、電動糸のこぎりを使って立体的な作品を作る学習活動である。

電動糸のこぎりは、直線だけでなく曲線にも切り分けることができ、切ることでそのものを楽しむことができる用具である。3年生で体験したのこぎりとは違って、材料を簡単に速く様々な形に切ることができる。しかし、その反面、刃の動く音が大きいこと、板の切れるスピードが速いこと、しっかりと板を押さえないと板が上下して切りにくい状態になってしまうことなどから、電動糸のこぎりを初めて使う子どもたちにとって、動かすのをためらったり、手を切ってしまうのではないかと恐怖心を感じてしまったりする用具でもある。

そこで、単元の始めに電動糸のこぎりについての説明を丁寧に行い、使い方の練習時間を十分に確保した。そして、子どもたちが安全に抵抗なく使えるように、練習用の板を使って繰り返し指導を行うことにした。その際、使う電動糸のこぎりは、4～5人のグループで1台とした。これは安全面を考えてのことだが、順番を待っている間にグループの中で情報交換ができるのではないかと考えたからでもある。

本単元では、電動糸のこぎりを使ってできる様々な形の板材を組み合わせて、立体に表すことを目標にしている。そこで、電動糸のこぎりを使って板材を切る楽しさを味わったり、偶然できた板材の形から作りたいものを構想したりすることができるように、「始めから切る形や作るものを決めなくてもいい。」「偶然切り取ったおもしろい形を組み合わせてできるもの。見た人が『何、これ?』と思う作品、説明を聞かないと分からない作品にしよう。」と子どもたちに伝えた。そして、せっかく曲線に切れる用具を使うのだから「くねくね曲線を意識すること」「平面ではなく立体的な作品を作ること」「接着剤を使わずに、板を組み合わせること」を条件にした。5年生の子どもたちにとって、接着剤を使わずに立体的なものを作るのは難しい課題ではあるが、おもしろい形に切り取った板材を高さや広がりのあるものに自由に組み合わせていく楽しさを味わってほしいと思っている。

②指導について

<切実な問題について>

子どもたちは何かを創ることが大好きである。絵画でも工作でも、「こういう絵を描きたい。」「こういう作品を作りたい。」と、自分で考えた構想に基づいて一生懸命に表現活動に取り組んでいる。本単元は、その中で

も特に子どもたちが大好きな工作の分野で、今まで一度も使ったことがない電動糸のこぎりを使って、作品作りに挑戦していく学習活動である。

本校の図工室には、電動糸のこぎりが、子どもたちの目に触れる場所に常時置いてある。そのため、図工室を利用する4年生になると「これ、何?」「何をする機械?」と誰もが興味関心を示し、使ってみたいという気持ちを持つようになる。そのため、「電動糸のこぎりを使って作品を作る」という課題は、子どもたちにとって、待ち望んでいた学習になると思われる。

しかし、電動糸のこぎりは、すぐには自分の思うように動いてくれない。そこで「どうしたらうまく切れるのだろう。」という問題が生まれてくる。練習を繰り返すのが一番だが、自分の順番を待っている間に、子どもたち同士の情報交換が自然に始まっていく。そして、友だちが切り取ったおもしろい形の板を見つけると「どうやって切ったの?」「自分もやってみたい。」と電動糸のこぎりでの板を切る楽しさが深まっていく。

様々な形に切ることができるようになると、いろいろな形に切れた板材を使って「これで何か作ってみたい。」という気持ちが生まれてくる。目の前の板材を見ながら「こういうものはどうかな?」「こうしたらおもしろいかも。」と発想が広がっていく。しかし、立体的に作っていくためには、「でも、どうやったら板が立つのかな。」「板を組み合わせるには、どうしたらいいのだろう。」という新たな問題が生じてくる。その解決のために、教科書を見たり、友だちと情報交換をしたり、セットの中にあるつなぎ用の板に着目したり等々、試行錯誤を始め、自分の作りたいものをめざして問題解決を図っていく。

このように、本単元は「電動糸のこぎりを使って作品を作りたい。」という単元をつらぬく切実な問題に向かって、いろいろな場面で解決しなければならない問題に直面していく学習であると考えられる。その一つひとつを解決しながら、子どもたちは自分の表現したい作品を完成させていく活動ができるのではないかと考えている。

<ひびき合いについて>

前時までに、子どもたちは、未体験だった電動糸のこぎりの使い方を覚え、切り出した板材を組み合わせ、自分が作りたいものを一生懸命に作ってきた。本時は、自分の作品を友だちに紹介し、自分と同じように一生懸命に製作活動に取り組んできた友だちの作品をお互いに鑑賞し合う場面である。意見を交流し、クラス全体の考えを深めたり、広げたりする話し合いの場面ではない。

しかし、自分の作品についてグループの友だちに説明したり、友だちから自分の作品についての感想を言ってもらったりする中で、自分の考えや思いに自信をもつことができるのではないかと考えている。そして、自分はこうやって作ったけど、友だちはどんな作品を作ったのだろうと、始めは好奇心からのスタートかもしれないが、友だちの作品を見ていくうちに、自分の考えになかった表現方法に気づき、作った友だちの作品への思いを感じることができるのではないかと考えている。そして、その感想をお互いに交流する中で、同じ題材、同じ用具を使っても、一人ひとり違う表現になることに気づき、お互いの良さを認め合うことができるのではないかと考えている。そして更に、自分では思いつかなかった新しい表現の仕方を知り、これからの製作活動にいかしていきたいと次への創作意欲につなげることができたらと思っている。その姿を「ひびき合いの姿」としたいと思う。

5 単元構想

5年 図画工作科「糸のこすいすい」(10時間)

単元目標

- ・電動糸のこぎりで切り出してできる様々な形の板材を組み合わせて立体に表す。
- ・電動糸のこぎりで切り出してできた様々な形の板材を組み合わせて、立体に表す活動に取り組もうとしている。
- ・切り出した様々な形の板材を組み合わせてできるおもしろい形を考えている。
- ・板の切り方や組み合わせ方を元に、自分の思いに合った形に工夫している。
- ・互いの作品を見せ合い、切り出した形を組み合わせてできた立体作品の形のおもしろさを感じ取っている。

これって何だろう？

- ・前から気になっていたんだけど、これ(電動糸のこぎり)って何だろう。
- ・図工室にいつも置いてあるけど、何をやる機械なんだろう。 ・使ってみたいな。

電動糸のこぎりを使ってみよう。①①

- ・どうやって動かすんだろう。
- ・何が出来るんだろう。 ・何か怖そうな感じがする。

・電動糸のこぎりを使用する際の注意事項を確認する。

- ・刃の前に手を置かない。
- ・使っている人の近くに行かない。
- ・交代するときはコンセントを抜く等々

電動糸のこぎりの使い方を練習しよう。②

- ・いろいろな形に切れるんだね。 ・くねくね曲線に切れるからおもしろい。
- ・始めは怖かったけど、だんだん慣れてきた。
- ・切り取った板を使って何か作ってみたい。

電動糸のこぎりを使って自分だけの作品を作ろう。③

切り取った板材を組み合わせて作品を作ろう。④～⑥

- ・どうやって切ろうかな。 ・切り込み方が難しいな。
- ・どうやったらうまく立つんだろう。
- ・どうやって組み合わせていこうかな。

・板を組み合わせるための切り込みの作り方を確認する。

- ・いろいろと試しながら、どうすると高さや広がりのある組み合わせになるか考えさせる。
- ・一つの方角からだけでなく、多方向から見ながら、組み合わせを考えると良いことに気づかせていく。

色を着けて完成させよう。⑦～⑧

- ・どんな色合いにしようかな。 ・色の組み合わせを考えないと。
- ・立体になっているから、塗り方が難しい。
- ・やっとできた。 ・この形、二度と作れないかも。

友だちはどんな作品を作ったのだろう。みんなの作品も見てみたいな。

友だちの作品を鑑賞しよう。⑨(本時)

- ・いろいろな作品ができあがっていて、すごいな。
- ・おもしろい形に切れているね。 ・切り方が難しそう。
- ・板の組み合わせ方がおもしろいね。 ・細かい所まで工夫している。
- ・色の塗り方も工夫してあった。 ・今度作る時に参考にしたいな。

・お互いの作品のおもしろいところやすごいな、工夫しているな と思ったところについて、自由に話し合わせる。

- ・一方向からだけでなく、いろいろな角度から作品を見るように促す。

また、使ってみたい。今度は何を作ろうかな。⑩

- ・今度は何を作ろうかな。 ・今度では使える物を作ってみたいな。

6 本時について

- (1) 本時目標 友だちの作品を鑑賞し、切り出した形を組み合わせでできた立体作品の良さを感じ、お互いの表現を認め合えることができる。

学 習 活 動	主な支援・留意点【評価】
友だちの作品を鑑賞しよう。 1 自分の作品をグループの友だちに発表する。 ・切った形が「・・・」に見えたから作ってみた。 ・板材を組み合わせていたら、おもしろい形になったので、「・・・」という作品にした。 2 グループの友だちのよさや工夫したところを見つけ、カードに書く。 ・おもしろい形に切れているね。 ・板の組み合わせ方がおもしろい。 ・こんな風に立体的にするなんてすごい。 ・違う方向から見ると別の形に見える。 3 友だちの作品を鑑賞し、お気に入りの作品をクラスの人に伝える。 ・魚の形に見えたり、波の形にも見えたりするからいいなと思った。 ・偶然にできた形と言ってたけど、本当に恐竜みたいに見えた。 ・あんな組み合わせができるなんて思わなかった。 ・みんなの作品がどれも違っていて、みんなすごいと思った。	○自分が作った作品について、グループの友だちに丁寧に説明できるようにさせる。 ○書いたカードは、全体での鑑賞のときに、友だちの作品の紹介カードにもなることに気づかせる。 ○いろいろな方向から作品を見ながら、友だちの作品のよさや工夫したところを見つけられるようにさせる。 ◇友だちの作品を意欲的に見つめ、作品のよさを見つけようとしている。 【関心・意欲・態度】 ◇お互いの作品を見せ合い、切り出した形を組み合わせでできた立体作品の形のおもしろさを感じ取っている。 【鑑賞】

7 実践を終えて

本単元は、電動糸のこぎりを使ってできる様々な形の板材を組み合わせで、立体に表すことを目標にしている。そこで、電動糸のこぎりを使って板材を切る楽しさを味わったり、偶然できた板材の形から作りたいものを構想したりすることができるように、「始めから切る形や作るものを決めなくてもいい。」「偶然切り取ったおもしろい形を組み合わせでできるもの。見た人が『何、これ?』と思う作品、説明を聞かないと分からない作品にしよう。』と子どもたちに伝えた。そして、せっかく曲線に切れる用具を使うのだから「くねくね曲線を意識すること」「平面ではなく立体的な作品を作ること」「接着剤を使わずに、板を組み合わせること」を条件にした。5年生の子どもたちにとって、接着剤を使わずに立体的なものを作るのは難しい課題ではあるが、おもしろい形に切り取った板材を高さや広がりのあるものに自由に組み合わせでいく楽しさを味わってほしいと考えた。子どもたちは、こちらの予想以上に、電動糸のこぎりの操作に熱中し、授業時間の終了を告げると「えっ、もう終わり?」と誰もが声に出すほど、毎時間、夢中になって製作活動に没頭していた。

本時は、自分の作品を友だちに紹介し合い、お互いの作品を鑑賞し合う場面である。材料は、同じ1枚の板なのに、できあがった作品は一人ひとり個性にあふれている物ばかりであった。「こんな風に切れるなんてすごい。」「こんな作品ができるなんて思いもつかなかった。」等々、友だちの作品を鑑賞しながら、自分の考えになかった表現方法に気づき、作った友達の作品への思いを感じることができていた。

意見を交流し、クラス全体の考えを深めたり、広げたりする話し合いの場面での「ひびき合い」の姿とは多少違っているが、作品の感想をお互いに交流する中で、同じ題材、同じ用具を使っても、一人ひとり違う表現になることに気づき、お互いの良さを認め合い、自分の考えや思いに自信を持つことにつなげるひびき合いの姿は見られたのではないかと考える。

自分では思いつかなかった新しい表現の仕方を知り、これからの製作活動にいかしていきたいと次への創作意欲につなげることが今後の課題である。